

看護実践研究センター報告書

令和4年度

目 次

I	はじめに	1
II	令和4年度事業報告	2
1.	なごや看護生涯学習セミナー	2
	【看護研究セミナー】	
	(1) 看護研究いろはの「い」	
	(2) 看護研究いろはの「ろ」	
	(3) 看護研究いろはの「は」	
	【看護実践セミナー】	
	(1) 「聴き方」「伝え方」再考 ～フィンランド発「オープンダイアログ」体験～	
	(2) 呼吸管理 基礎と臨床 復習と演習問題	
	(3) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（ベーシック）	
	(4) 臨床倫理の4分割表を使いこなす	
	【看護研究出張講座】（次年度開催に向けての試験運用）	
	・西部医療センター	
	・東部医療センター	
2.	なごや看護生涯学習公開講演会	15
3.	地域連携セミナー	18
4.	看護研究サポート	21
5.	昭和生涯学習センター共催講座	23
III	今後の課題	26

名古屋市立大学大学院看護学研究科

名古屋市立大学病院看護部

名古屋市立大学医学部附属東部医療センター看護部

名古屋市立大学医学部附属西部医療センター看護部

I はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大に対し緊急事態宣言が出される等、私達の日常が一変してから約3年が経とうとしています。日常生活を制限せざるを得ない状況が長い間続きましたが、近年はウイルスと共存する社会の在り方を模索するようになってきました。

看護実践研究センター（以下、センター）においても、延期や中止が相次いだ時期を経て、今年度は予定していた活動を比較的計画通りに実施することができました。特に、なごや看護生涯学習公開講演会を看護実践研究センター設置 10 周年記念事業と位置付けて開催し、盛況のうちに終了できたことは大変喜ばしいことでした。一方で、コロナ禍で落ち込んだセミナー等の参加者数は、以前ほどには戻らず、悩ましい状況が続いております。そのような中、センターでは、対象者の皆様のニーズがどこにあるかを日々議論し、今年度は、看護研究支援に関する新規企画を立案し、トライアルで実施することも出来ました。成果としては様々ではありますが、どの活動も委員が少しでも皆様のお役にたてるようにと思いながら取り組んだ活動です。以下に、今年度の活動を総括し、あわせて今後に向けての課題を述べさせていただきます。

II 令和4年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：渡邊実香、小山晶子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。今年度は看護研究セミナー3件、看護実践セミナー4件を企画した。看護実践セミナーのうち1件はオンラインによる遠隔開催とし、大きな問題もなく円滑にセミナーを実施することができた。対面によるセミナーは、十分な感染対策のもとで開催した。また、施設向けの看護研究出張講座開催の試験的運用として、講師を施設現地に派遣した。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	セミナー実施の承認・検討 テーマおよびセミナー担当者募集開始
5月	テーマ申込み状況の把握 全テーマの開催日程、場所決定、教室予約 チラシ、チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 参加申込方法（メール申込、FAX申込）の検討 チラシ印刷発注
6月	チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計155箇所） 参加者募集開始 看護実践研究センターホームページで告知開始 受講生に受講カードの送付参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討
7月	アンケートの検討 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表、受講カード、アンケートの決定 セミナー申込み締切（各セミナーの日程により申込み締切を延長） 事務に領収書の依頼
7月 ～12月	各セミナー実施 実施前：受講者の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載

	<p>【看護研究セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護研究いろはの「い」 (7/21) ・看護研究いろはの「ろ」 (7/30) ・看護研究いろはの「は」 (9/16) <p>【看護実践セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「聴き方」「伝え方」再考 ～フィンランド発「オープンダイアログ」体験～ (9/17) ・呼吸管理 基礎と臨床 復習と演習問題 (11/17) ・急変させないためのアセスメント能力を高めよう (ベーシック) (11/27) ・臨床倫理の4分割表を使いこなす (12/3) <p>【出張講座】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護研究出張講座 (2/28・3/2)
--	--

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講師：脇本寛子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日時：令和4年7月21日（木）9時～16時

場所：名古屋市立大学 西棟講義室 A、看護学部棟 303 演習室

募集人数：10名

参加者：3名

参加費：6,000円

〈内 容〉

講義は、10項目（①はじめに、②看護研究とは、③看護研究のプロセス、④研究テーマ・研究課題の設定、⑤研究疑問、⑥研究論文の構成要素、⑦文献検索と文献検討、⑧研究デザイン、⑨倫理的配慮、⑩研究計画書の構成要素）の構成とした。午前（9時～12時）は①～⑥、午後（13時～16時）は⑦～⑩の内容とした。

受講生のニーズを把握するため、冒頭で、受講生に受講動機と特に学びたい内容について一人ずつ発言する機会を設けた。今年度は、研究計画書と文献検索について詳しく知りたいとの要望があり、受講生のニーズに合うように内容を調整した。⑤研究疑問の項目において、受講生が日常の実践における疑問を文章化し、研究疑問として表現することができるよう、個人ワークの時間を設けた。受講生に守秘義務の遵守を確認した上で、一人ひとりの疑問を全体で共有し、日常の実践における疑問が研究疑問ひいては研究目的に昇華できるよう助言をした。さらに、⑦文献検索においては、受講生が関心のあるキーワードを用いて文献検索を実際に医学中央雑誌（Web版）で実施した。どのように文献検索を

行うのか、文献検索の結果からキーワードをどのように設定するのかなど、受講生のニーズに合わせて説明した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

1日6時間の集中講義であったが、受講生は終始集中して受講されていた。受講生のニーズに合うように内容を調整したこと、受講生一人ひとりの研究疑問に関してフィードバックを行ったことから、セミナーの理解度や満足度は良かった。



〈アンケート結果〉

参加者3名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機は、「新しい知識を得る」1名（33.3%）、「必要に迫られて」1名（33.3%）、「興味・関心があった」1名（33.3%）であった。セミナーの内容は3名全員が「わかりやすかった」と回答した。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講師：宮内義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：令和4年7月30日（土）9時00分～16時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理教室

募集人数：9名

参加者：1名

参加費：6,000円

〈内容〉

午前、午後で合計6時間の『看護研究いろはの「ろ』』を開講し、「量的研究の基礎」を

テーマに講習を行った。量的研究とはどのようなものであるかを知り、量的研究を行うために必要な基礎知識を学習し、量的研究でのデータ分析に必要な統計学の基礎と統計解析を理解し、活用するための方法を学ぶことを目的に講習を行った。基礎とは言い、馴染みのない方が多い数学的な内容であるため、パソコンを用いた統計解析の演習を取り入れ、学びやすいように工夫した。

講習の概要は以下の通りである。

1) 研究デザインの分類と量的研究 9:00～12:00

まず、研究デザインにおける量的研究について概説し、次に、研究に当たって重要な論理的推論について概説した。さらに、量的研究の両翼となる観察研究と実験研究について詳説し、実験研究で問題となるバイアスについては事例を通して理解を深めた。

2) 統計学の基礎と基本的な分析方法 13:00～15:00

データの代表値、基本的な統計量の説明から始め、正規分布、母集団と標本、信頼区間、仮説検定、帰無仮説、p 値、有意水準、検出力、第一種と第二種の過誤、自由度、二項分布について詳説した。次に、t 検定、符号検定、U 検定、 χ^2 検定といった検定方法について考え方から計算方法まで詳細に説明した。

3) ソフトウェアを用いた統計解析の演習 15:00～16:00

統計解析に使えるソフトウェア並びに Web サイトを紹介した。次に、 χ^2 検定を用いる例題について、Excel、SPSS、EZR、Web サイト (js-STAR) を用いて解析の演習を行った。特に、Excel については χ^2 検定を順次行うシートを作成し、理論通りに計算を行うことで χ^2 検定が行えること、統計解析専用ソフトウェアと差異の無い結果が得られることの確認をした。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

昨年同様、受講にあたり Excel 使用経験を条件としていたが、実際はあまり使用経験がない受講生であった為、後半の演習は無理の無い程度で行った。前半の数学的な内容の説明では、一つ一つ理解の程度を確認しながら進め、理解が進まない部分は説明を繰り返した。

たり、説明の表現を変えたりするなどが必要であった。しかし、アンケート結果から参加者は「どちらかと言えば難しかった」と回答しているのでその効果は不十分であったと思われる。一方、今後にいかすことができるかを問う設問では「そう思う」と回答していることから、現在の基礎的な内容が具体的な研究でも大切なものであることは理解されたと思われる。今回の経験を踏まえて、より理解しやすい説明事例を活用した講習にしていけることが次年度の課題と考える。

〈アンケート結果〉

参加者1名からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で多かったものは、「職場の上司の勧め」1名（100%）であった。また、セミナーの内容は「どちらかといえば難しかった」と回答した。

(3) 看護研究いろはの「は」

講師：大橋麗子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：令和4年9月16日（金）10時00分～15時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室

募集人数：10名

参加者：2名

参加費：4,000円

〈内容〉

1) 講義内容項目

1. 質的研究とは
2. 質的研究のプロセス
3. アイディアからリサーチクエスチョンへ
4. 研究方法を考える
5. データ収集
6. データ分析
7. コード化、カテゴリ化を体験してみよう！（演習）
8. 分析結果の解釈
9. 質的研究の「質」を確保するために

2) 講義概要

実践を基にした看護研究を計画、実施する際に進める順序に沿って、講義を構成した。

まず、質的研究とはどのような研究なのか、どのようなリサーチクエスチョンに適しているのか、量的研究との違いはなにかについて丁寧に説明を行った。質的研究の方法論については、その前段階であるアイディアからリサーチクエスチョンへの発展のさせ方、日常の実践での気づきをどのように看護研究にまでつくりあげるかについても説明を行った。研究方法については、実際の論文を示しながら、初学者が取り組みやすい研究方法を具体的に紹介した。データ収集方法については、基礎的事項をおさえながら、

インタビューによるデータ収集方法についていくつか説明をし、実際のデータ収集における注意点などを説明した。データ分析については、コード化、カテゴリ化について説明後、実際のデータを用いて演習を行い、参加者にコード化、カテゴリ化を体験していただいた。最後に、質的研究の「質」を確保するための視点と方法について説明を行った。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

参加者が2名ということもあり、参加者の看護研究についての経験や今後の計画を伺ったうえで講義を実施した。講義の途中では、参加者の状況を確認し、具体的説明を追加したり、質問を受けたりした。アンケート結果からも「わかりやすかった」との評価を得ており、参加者のニーズにあった講演を実施できたと考える。



〈アンケート結果〉

参加者2名のうち、2名からアンケートの回答があった（回収率100.0%）。セミナー参加動機で多かったものは「必要に迫られて」2名（100.0%）であった。また、セミナーの内容は2名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・資料も、講義も分かりやすかったです。家でまた復習します。
- ・少人数だったので、個人的なことがたくさん質問できたのでありがたかったです。

【看護実践セミナー】

(1) 「聴き方」「伝え方」再考 ～フィンランド発「オープンダイアログ」体験～

講師：門間晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

加藤まり（名古屋市立大学大学院看護学研究科・博士後期課程）

日時：令和4年9月17日（土）13時00分～16時30分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室

募集人数：15 名

参加者：2 名

参加費：4,000 円

〈内 容〉

参加人数が少ないことがわかっていたため、講話部分は少なくし、できるだけ体験的な内容や支援者としての参加者の日頃の悩みを共有できるような場にしたいと考えていた。大まかに以下のような流れで進めた。

1) オープンダイアログ (OD) とは

フィンランドから導入された OD の発祥・実際、7 つの原則、12 の基本要素、日本での広がりなどについて、フィンランドでの研修ツアーの様子を含めて話題提供した。

2) 「聴く」「応答する」ための工夫：演習

(1) 「聴く」と「話す」を分ける体験

(2) 対話の可能性を広げるリフレクティング

ファシリテーターもともに参加しながら演習を行った。OD の基本である「聴く」「応答する」を同時に一人の人が行うことは難しい。人や時間を分けて「聴く」と「応答する」の体験、および対話の可能性を広げるために OD では必須として用いられる「リフレクティング」を体験した。

3) 全体振り返り

本日の主に演習を通しての感想を参加者が述べた。支援におけるどのような場面で今回の「聴き方」「伝え方」が活用できそうかを話し合った。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

時間的には、演習にたっぷり時間をとることができた。終了後アンケート結果によると、ある程度分かりやすいと感じていただけ、今後の役に立てていただける内容を提供できたと考える。



〈アンケート結果〉

参加者2名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で最も多かったのは「興味・関心があった」2名（100%）であった。また、セミナーの内容は2名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・実際に体験できて、学びが深まりました。

(2) 呼吸管理 基礎と臨床 復習と演習問題

講師：薊 隆文（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日時：令和4年11月17日（木）18時30分～20時30分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室

募集人数：10名

参加者：1名

参加費：2,000円

〈内容〉

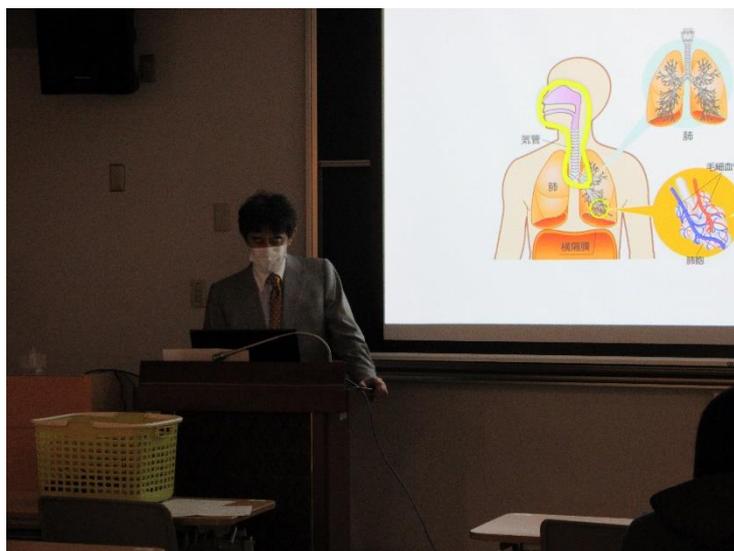
本来は3回の講義だったが、1回だけの希望だったので、内容を短縮した

本来は

- ①誰にでもわかる呼吸管理の基礎
- ②臨床に必要な呼吸生理 モニター偏
- ③人工呼吸に必要な呼吸生理

であったが、受講者の希望は人工呼吸モニターの見方であったため

呼吸生理の基礎、人工呼吸のグラフィックモニターの見方、PaO₂・SpO₂の見方読み方を中心として、主にQ&A方式で行った。かなり駆け足で行ったが、必要最低限のことは2時間で行えたと思う。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

反応は極めて良好、理解度も期待通り。
はじめから受講者の希望に合わせた部分が大きいと思う。

〈アンケート結果〉

参加者1名からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」と回答した。

(3) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（ベーシック）

講師：清水真名美、加藤紀子、寺澤涼子、稲尾景子、岩田麻衣子
（名古屋市立大学病院・救急看護認定看護師、集中ケア認定看護師）
日時：令和4年11月27日（日）9時00分～10時30分
場所：名古屋市立大学病院 臨床シミュレーションセンター
募集人数：20名
参加者：1名
参加費：1,500円



〈内 容〉

このセミナーは、受講生に「対象の急変前徴候に気づき、適切な処置を行うことで、防ぎえた心停止・防ぎ得た後遺障害に至らない対応ができる能力を身につけてもらうこと」を目的としている。急変前徴候に気付けるかは、観察者の予測範囲によって異なるため、看護職は、日常的に急変に備えた対応能力の向上が必要であり、このセミナーでは、系統的に観察できるための迅速評価、一次評価 および BLS、医師への適切な報告、その後の迅速対応について講義・グループ討議・演習を通し、学習する内容となっている。

応募受講生4名を一グループとして、講義・グループ演習予定で開催準備を行ったが、

応募者4名のうち3名が同施設勤務者で、その3名の勤務施設職員でCOVID-19の発症者があったことから、上司命令もあり当日急遽欠席になった。

欠席の受信時連絡では、もう1名の応募者への中止連絡が間に合わず、会場到着後に予定セミナーの開催が出来なくなったこと、講義のみの受講は可能であることを伝えることになった。受講希望があったため、9:00～10:30の講義のみ受講いただいた。

「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントし、『死に結び付く可能性のある危険な徴候』があるか判断する」迅速評価、BLS、「簡単な器具（血圧計、生体情報モニター、聴診器、ペンライト、体温計）を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う」一次評価について講義し、受講生の過去の体験事例について、考えられたこと、より望ましい対応等について講師とディスカッションを行った。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

受講生からは、「一人の受講生のために講義いただき有難うございました。日頃の援助後のもやもやについて解消出来、学びになりました。」との感想を頂いた。予定したセミナー内容ではなかったが、開催出来、受講生の受講目的の達成に寄与出来たと考えている。

〈アンケート結果〉

参加者1名からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」「新しい知識を得る」「興味・関心があった」であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・急変する前の患者さんの変化について、くわしく理解できました。
- ・患者さんの観察ポイントがわかりました。これからは脈圧や呼吸状態も観察していきます。

(4) 臨床倫理の4分割表を使いこなす

講師：澤田美和（名古屋市立大学大学院看護学研究科・助教）

日時：令和4年12月3日（日）13時00分～15時00分

場所：Zoomによる遠隔ライブセミナー形式

募集人数：15名

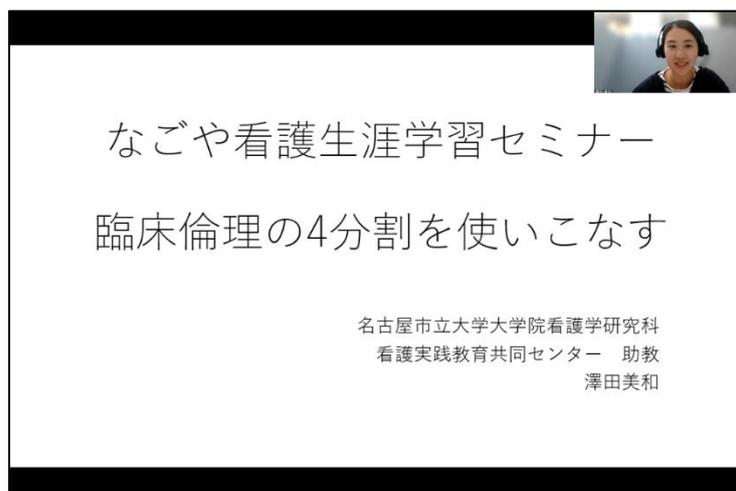
参加者：6名

参加費：2,000円

〈内 容〉

講義内容の構成は、①倫理的行動の4要素と4分割表の位置づけ、②倫理的推論プロセスと倫理的推論パターン、③臨床倫理4分割表と倫理原則、④臨床倫理4分割表を作成する上でのポイント、⑤倫理カンファレンスの組み立て、⑥倫理カンファレンスにおけるファシリテートのポイントの6項目とした。

受講生の背景を把握するために、所属部門や臨床倫理活動の取り組みの段階（自らが事例を分析する・後輩が事例を分析するのをサポートする・看護倫理カンファレンスを開催してファシリテーターを担う・多職種臨床倫理カンファレンスを開催しファシリテーターを担う・院内からコンサルテーションを受ける・臨床倫理委員会のメンバーとして倫理コンサルテーションをうけ現場を支える）について質問し、Zoom 画面上のリアクションボタンで反応してもらった。所属部署は、病棟や外来で、部署を支えるような立場で活躍されている方が多かったため、解説しながら例示する内容を調整した。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

講義中は、画面OFFにして参加していたため、表情などタイムリーな反応は確認できなかったが、問いかけに対してはリアクションボタンで反応していただいた。最後には、ACPに関連する質問が1件あった。

今回は、4分割表の項目を詳細に解説したもので事例検討会形式では行っていないため、別の事例検討会を紹介したが問い合わせはなかった。

アンケートでも事例検討会の要望があったため、今後は2部構成として事例検討会を加えることを検討していく。

〈アンケート結果〉

参加者6名のうち、5名からアンケートの回答があった（回収率83.8%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」5名（100.0%）であった。また、セミナーの内容は5名全員が「わかりやすかった」と回答した。

【看護研究出張講座】

講師 明石恵子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

開催費 無料

・会場 名古屋市立大学医学部附属西部医療センター2階大ホール

日時 令和5年2月28日(日)14時30分～15時30分

- 参加者 21名
・会場 名古屋市立大学医学部附属東部医療センター入院・診療棟 会議室1
日時 令和5年3月2日(木) 10時30分～11時30分
参加者 16名



〈内 容〉

施設向けの看護研究出張講座開催の試験的運用として、西部医療センターと東部医療センターに看護学研究科の講師を派遣した。講座の構成は研究に関するミニ講義と自由討論とした。ミニ講義は、看護研究の基礎として研究テーマの見つけ方を中心に40分ほどで解説した。自由討論では、参加者が4～5人のグループに分かれ、20分ほど研究について自由に話し合った。参加者の背景は、文献検索を行ったことがない者から研究を実施し論文文化したことがある参加者まで幅広かった。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応とその考察〉

参加者の多くは、講座受講により、今後の臨床活動につながると感じ、看護研究に関し、具体的な聴講希望意見も寄せられ、次年度の開催に向けての方向性も示され有意義な講座となった。中でも、研究経験がある参加者は、講座を踏まえ、今後の研究実践への意欲の高まりに繋がった傾向が見られた。講座構成に関し、質問コーナーを設けること、自由討論はテーマ設定があるほうが、議論が活発化する様子だった。

〈アンケート結果〉

参加者 21 名、16 名 計 37 名のうち、全員から回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機は「上司・同僚に勧められた」18 名（85.7%）・12 名（75%）であった。また、セミナーの内容は「わかりやすい」13 名（61.9%）・14 名（87.0%）だった。

3) 課 題

今年度は、看護研究セミナー3 件、看護実践セミナー4 件を企画した。うち、オンラインによる遠隔開催は 1 件であった。

全般的にセミナーの参加者が少なく、昨年同様、Covid-19 の影響が関与しているものと考えられたが、少人数の受講者を対象に丁寧な講義内容であったため、参加者からはいずれのセミナーも高い評価が得られた。

今年度も昨年度に引き続き、2007 年より開催されてきたセミナー事業を総括し、事業開催方法を見直す検討を行った。経年的に参加者数の減少は否めず、企画運営に対する改善の必要性が確認された。そこで、次年度は、セミナーの最小開催人数の設定を検討する。加えて、訪問看護師や高齢者施設で働く看護師を対象とした新たなセミナーの開催、名市大病院、東部医療センター、西部医療センターに所属する認定看護師等によるセミナーを検討している。看護研究出張講座を 2 回の試験的開催を行ったところ、施設で受講できる点で参加者の確保につながり、看護研究への意欲を高めることに貢献できる様子だった。しかし、参加者の背景により、理解度に影響が生じる可能性もあるため、次回からは参加者の背景を把握して講義展開する必要性が示された。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：宮内義明、大橋麗子、青木美千代、小室香、山吹美貴

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。また、本年度はなごや看護学会との共催として、下記の通り準備を進めた。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	テーマ・講師について検討
6月	テーマ・講師について検討
7月	チラシ（案）の検討、講師・テーマ・参加費・開催日時の決定 会場予約
9月	チラシ送付先・印刷枚数の検討 チラシ原稿の確認
10月	アンケート内容の確認 印刷発注（1,500部） 事務へプレスリリース依頼 プレスリリース（名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブ） 看護実践研究センターホームページ告知開始
11月	チラシ納品、チラシ発送 講師への最終確認書類の発送
12月	当日役割分担の検討
1月	参加申し込み状況、準備状況の確認、配布資料到着 開催方法変更決定、講師、参加者への変更通知
2月	公開講演会実施
3月	オンデマンド配信 実施報告

2) 事業の実施内容

テーマ：人生100年時代 最期まで暮らし続けられる地域をめざして

講師：秋山正子氏（認定NPO法人マギーズ東京 共同代表理事）

日時：令和5年2月1日（水）18:00～19:30

場所：Zoomによる遠隔ライブセミナーおよび事後オンデマンド配信

参加費：なごや看護学会会員 500円 非会員 1,000円

参加者：119名（オンデマンド参加者、講演会関係者含む）

〈内 容〉

今年度は、看護実践研究センター10周年記念事業として、在宅看護の草分けとして1992年から新宿区を中心に訪問看護を始め、2011年から新しい相談支援の形となった「暮らしの保健室」、そして2016年にはマギーズセンターを東京にという運動を結実された認定NPO法人マギーズ東京共同代表理事の秋山正子氏をお招きし、「人生100年時代 最期まで暮らし続けられる地域をめざして」というテーマで人生の最終段階への温かく自然なサポートについてご講演いただいた。

当初は10周年記念事業として4年ぶりに対面での講演会を行うべく準備を進めてきたが、年明けからの新型コロナウイルス感染第8波の蔓延を受けて、開催日の2週間前に対面での講演会は断念し、ZoomによるWeb開催のみで実施することになった。開催方法の変更という形になったが、講師をお願いしたマギーズ東京の秋山先生がZoomでの講演に慣れておられたこともあり、極めてスムーズで大変分かりやすい講演会となり、参加者から好評をいただく講演会となった。加えて公開講演会后、秋山先生のご講演を聴きたかったという声を公開講演会に参加されなかった方々から得たことからオンデマンド配信を行うことを決定し、秋山先生にご了解をいただいた上で、公開講演会と同額の参加費で募集を行い、多くの参加者を追加することになった。



3) 参加者アンケート結果

参加者119名のうち、45名からアンケートの回答があった(回収率38%)。参加者のほとんどは看護師(66.7%)であったが、看護系大学教員、保健師、医師、学生と本講演のテーマを反映した多職種が参加していた。講演内容について、「分かりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は全員(100%)とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 患者さんの思いに寄り添うことの重要性を理解できた。
- ・ 現場の活動がより理解できた。自身の看護について見つめ直す機会となった。

- ・話が聞き取りやすいスピードであった。具体例を示していただき、イメージしやすかった。
- ・実例を基にお話いただいたのが、分かりやすかったです。言葉の意味がわからないところがあったのは自分の勉強不足でした。
- ・多くの地域、看護職の思いや協力を生かして起業し、地域の介護に尽力できていることが素晴らしい。
- ・訪問診療や訪問看護をしている当院でのあり方や方向性を地域とつなぐつながり方がイメージできた。
- ・仕事にも活かせると思いますが、むしろ私生活の方により活かせると感じました。
- ・実践ができる場にはいないが、学生へ伝えることができると感じた。

4) 課題

講師の予定に合わせて開催日を決めたが、月初めの開催日としたことで病院看護師には勤務調整がしづらかったのではないかと思われた。できる限り月後半の開催日となるように調整を行った方が参加者増に結びつくと考える。

急遽決定して実施したオンデマンド配信では、関心のありそうな知り合いの看護職へ、講演会の案内の情報を拡散して参加者を募る方法をとったが、予想以上の参加者を得ることができた。次年度以降も可能であれば同様の方法を追加することで効果的な案内になると考える。

3. 地域連携セミナー

担当：大橋麗子、宮内義明

「地域連携セミナー」は、市民の皆様と保健医療福祉関連職種が連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げ開催している。さまざまな立場の人が同じテーマについて考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待する事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
9月	テーマ及び講師の検討
10月	テーマ及び講師の決定 講演内容、日程等を講師と交渉 会場の決定 チラシ送付先の検討
11月	チラシ（案）の作成と検討
12月	知の広場掲載依頼
1月	広報なごや4月号への掲載依頼
3月	企画広報課へのプレスリリース依頼 チラシ原稿最終確認、印刷依頼（1,100部）
4月	チラシ発送 看護実践研究センターホームページで募集告知 参加者募集開始（FAX、インターネット） 参加申込者への参加の可否連絡
5月	講師へ当日資料等の最終連絡
6月	準備状況、参加申し込み状況の報告 事前受付リスト作成開始 領収書発行の依頼
7月	配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施予定内容

テーマ：在宅リハビリテーションの活用法－元気で楽しい生活を続けていくために－
講師：福田貴子氏（医療法人生寿会 かわな病院 リハビリテーション科 課長）
日時：令和4年7月9日（土）13時00分～15時00分
場所：名古屋市立大学看護学部 西棟 講義室A
参加費：500円
参加者：49名（講演会関係者含む）



〈内 容〉

「在宅リハビリテーションの活用法 ～元気で楽しい生活を続けていくために～」をテーマとした講演を開催した。元気で楽しい生活を続け、医療や介護の必要な状況に陥らないために、自身で取り入れやすい体操や歩き方と、運動を無理なく継続的に生活に取り入れるためのポイントについてご講演いただいた。自分の体力を知るためのテスト、ストレッチ体操、筋力トレーニングについては、福田先生のご指導のもと実際に参加者の皆様も実演し、在宅リハビリテーションの活用法について知識を深めることができた。

3) 参加者アンケート結果

参加者 42 名のうち、40 名から回答があった（回収率 95.2%）。参加者は、一般の方が 21 名（52.5%）、医療・福祉職が 25 名（62.5%）であった。一般の方では無職 10 名（25.0%）、医療・福祉職では理学療法士・作業療法士・言語聴覚士 9 名（22.5%）が最も多く、他に看護師、ケアマネージャー、ヘルパー、介護福祉士が参加した。参加動機は「興味関心があった」22 人（55.0%）が最も多く、次に「新しい知識を得る」16 名（40.0%）であった。

以下に参加者の感想の一部を記す。

- ・介護保険制度の基本理念内に自ら要介護状態となることを予防するのは、国民の努力及び義務と定められていることは知らなかった。
- ・わかりやすい言葉で興味のある内容でした。リハビリは生きがいではない。生活ではない。プロセスだということを再確認できました。
- ・加齢による身体・心の衰えは当然のこととと思っていましたが日々の努力と意識が必要と感じました。
- ・ストレッチや筋トレの具体的な指導方法で、日頃自分がおこなっているふりかえりにもなりました。また指導のポイントも自分が気づかなかったことも学ぶことができました。リハビリはやってもらうものではない!!大切だなと感じました。



4) 課 題

今年度は、名古屋市立大学教育研究部学術課に協力を求め、同課が把握している本学市民公開講座の情報配信を希望している方々にも地域連携セミナーの案内メールを送り、多くの参加申込があった。今後は、申し込み時にメールアドレスを伺い、了解のうえで講演案内メールを送付することを検討したい。参加者からは今回のようなテーマで是非また開催して欲しいとの声がきかれた。

市大病院工事に伴い、看護学部棟ではなく西棟 2 階講義室 A を会場とした。会場へのアクセスについて、地下鉄または市バスを利用する方を西棟入口まで誘導することはできたが、西棟入口がどこか迷う参加者がいた。また、車やタクシーで来場した場合、東側入口がわかりにくく案内人が必要であった。西棟に入ってから、エレベーターを利用する場合にはテンキーでドアを開錠する必要があり、階段を利用する場合には階段に進む鉄扉を案内する必要がある。以上のことから、西棟を会場にする場合には、西棟の東西出入口に 1 名ずつの案内人、西棟内部のエレベーター前に 1 名の計 3 名は最低限必要である。

西棟 2 階のトイレは、洋式がひとつしかなく、ご高齢や足の不自由な方の利用に洋式トイレ数が不足していた。急遽 1 階のトイレをご案内したが、トイレまで距離がありご負担をおかけすることとなった。講演テーマによっては、想定される参加者の特性に合わせて会場設定をするとういよ考える。

4. 看護研究サポート

担当：脇本寛子、明石恵子、青木美千代、小室香、福留元美

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学研究科の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【2022 年度看護研究サポート】前期 2 件、後期 2 件

時期	内容
4 月	前期看護研究サポートの募集開始
5 月	前期看護研究サポートの募集締め切り（5/16 締め切り、2 件申込） 研究チームと教員のマッチング
6 月	個別相談の募集開始
7 月	後期看護研究サポートの募集開始
8 月	前期看護サポート状況の中間確認の実施
9 月	後期看護研究サポートの募集開始（9/7） 前期看護研究サポート中間確認の結果報告 個別相談 10 月分申し込み状況の報告
10 月	後期看護研究サポートの募集締め切り（10/3 締め切り、2 件申込） 研究チームと教員のマッチング 個別相談 9 月 10 月分アンケート集計結果報告 個別相談 11 月 12 月分申し込み状況の報告
11 月	個別相談 11 月分アンケート集計結果報告 個別相談 1 月分申し込み状況の報告
12 月	個別相談 12 月分アンケート集計結果報告 個別相談 2 月分申し込み状況の報告
1 月	後期看護研究サポート中間確認の結果報告
2 月	昨年度実施のアンケート調査結果を基に、次年度の事業案について提案
3 月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ（3/1 締め切り）

事業の実施状況

看護研究サポートは 2021 年度よりなごや看護学会と共催で実施しており、研究サポートの受付等はなごや看護学会事務局が行っている。看護実践研究センターは、研究サポート申込者のうち、なごや看護学会非会員に対するサポートを看護学研究科の教員に依頼している。また、昨年度は年 1 回（5 月）の受付であり、年度初めの研究開始は難しいとの

意見があった。そのため、後期開始の事業展開をなごや看護学会に提案し、後期開始の研究サポートも実施することになった。その結果、前期 2 件、後期 2 件、合計 4 計の応募があった。後期も応募があり、ニーズに応えることができた。

前期開始の中間報告は対応を要する事案はなかった。しかし、後期開始の中間報告 1 件において、進捗が思わしくなく、対応について協議した。その結果、受講生の主体性に任せていたが、サポート教員から進捗状況の確認をすることや支援のニーズを把握することなど、研究継続を支援するような働きかけを強化する必要性が提言され、そのように関わることとした。

昨年度の検討をもとに、今年度から個別相談（無料、1 回 30 分程度、全 6 回）を開催した。応募者は、予約枠 6 名、当日枠 6 名、合計 12 名であった。複数回利用は、3 名（いずれも 2 回）であった。参加者の満足度は高く、次年度は予算化することとした。現在は、下記の内容を予定している。

- ・ 1 回 30 分枠（正味の相談時間を 30 分とし、前後の挨拶、準備、片付けの時間を考慮し、教員は 45 分の時間枠と考え対応する）
- ・ 500 円徴収（無料のニーズはあるが 500 円の個別相談との区別がつきにくく混乱する可能性があるため、来年度の無料相談は実施しない）
- ・ 対面、Zoom ご希望に応じる
- ・ 7 月から開始（予約枠、当日枠の設定）
- ・ 2 回までのご利用（予約枠・当日枠併せて）
- ・ 看護研究サポートを受けている期間中の個別サポートへの申し込みは、ご遠慮頂く
- ・ 看護学部教員との共同研究（予定を含む）を予定している方の申し込みは、ご遠慮頂く
- ・ チラシ送付先：他事業と併せて送付、卒業生・修了生・同窓会への配布を提案、SNS

3) 課題

次年度からは、看護研究サポート（個別相談）は、有料の事業となる。今後さらなる意見交換を行い、事業評価を行っていく。また、個別相談のアンケートから、研究計画書の書き方、研究倫理審査、データ分析方法についての学習ニーズが高かった。セミナーなどを開催する際は、これらの項目についてのテーマを検討するとよいと考えられた。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：小山晶子、脇本寛子

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で8回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	昭和生涯学習センター担当者と講座開催方法の検討 (実務は名古屋市教育委員会 生涯学習課が担当) 企画テーマと講師案の検討
5月	会場の予約と会場下見・打ち合わせの日程調整 昭和生涯学習センター担当者へテーマ・講師案について相談・意見を依頼 講師との交渉開始(メール・電話で検討) 講座のねらい、コマタイトル・コマ毎のねらいを整備
6月	テーマ、講師、開催日時の決定 創新、知の広場掲載依頼
8月	広報、参加者募集開始(昭和生涯学習センター担当者) 講座案内のチラシデータ(昭和生涯学習センター担当)を受け取り
10月	講師への依頼書発送(昭和生涯学習センター担当者)
12月	会場の臨場確認(昭和生涯学習センター担当者と共に使用教室等)
1月	講座の運営開始(1/13, 1/27, 2/3, 2/17) 第1回公開講座アンケート集計の確認・講師フィードバック確認
2月	第2-4回アンケート結果確認・講師フィードバック確認
3月	次年度以降の運営方法案提示(3/17 会議) 看護実践研究センターホームページに開催報告掲載 全学ホームページに開催報告掲載

2) 事業の実施内容

令和4年度後期昭和生涯学習センター事業として、「自分の足で歩き続けるために」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は29名であった。第2回～4回目は現地学習(受講料:900円)で、応募者90名から抽選で31名の受講者が選定された。本年度も新型コロナウイルス感染予防対策として、会場の収容人数3分の1以下となる規模で開催した。

開催日時	内容	講師
1月13日 14:00-16:00	足腰との付き合い方ー病気の基本知識 とその対策ー	小林真（名古屋市立大学大学院医学研究科）
1月27日 14:00-16:00	活き活きとした体づくり ①運動について考える	石黒真衣（名古屋市立大学病院 リハビリテーション技術科）・中村祐実（名古屋市立大学病院 リハビリテーション技術科）
2月3日 14:00-16:00	活き活きとした体づくり ②食事・運動の考えを深める	小田嶋裕輝（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）
2月17日 14:00-16:00	活き活きとした体づくり ③自分の身体機能を知る	原沢優子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授） 小山晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）



3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りであった。

第1回目の公開講座は、受講者 59名にアンケート用紙を配布し、58名から回答があった（回収率 98.3%）。講座の内容は、「たいへんよかった」「まあまあよかった」と答えた人が 50名（86.2%）、講座の満足度は、「たいへん満足」「ほぼ満足」と答えた人が 49名（84.5%）であった。以下、受講者の感想・意見（一部）を掲載する。

- ・説明が丁寧で、例などがおもしろかった。
- ・今日からできること（カルシウムをとること、筋力低下を防ぐ運動）をしていきたい。
- ・骨密度が同世代の平均値より低いので気になっていた。話が聞けて良かった。

第2～4回目の現地学習は、第4回目の受講者23名にアンケート用紙を配布し、23名から回答があった（回収率95.8%）。講座の内容は、「たいへんよかった」「まあまあよかった」と答えた人が22名（100%）、講座の満足度は、「たいへん満足」「ほぼ満足」と答えた人が21名（95.5%）であった。以下、受講者の感想・意見（一部）を掲載する。

- ・分かりやすい講義でとても良かった。
- ・大学での講座はどんな題目でも面白い。
- ・今回の話を参考にして自分の体力維持に努めていきたい。

4) 課題

昨年度に引き続き、教育委員会、昭和生涯学習センター、看護学研究科担当者の役割を一覧にし、5月に確認した。加えて担当者間で密な連絡を行い、円滑に運営できた。

会場設営は例年どおり、コロナウイルス感染症に配慮した。参加者から感染対策に関する不安等の訴えは無かった。

学内の工事に伴い、西棟2階の会場（講義室A）までの案内に人員を要した。第1回目の公開講座の際は、昭和生涯学習センターより4名のスタッフ、学内より担当教員2名、事務1名にて誘導、運営を行った。その結果、受講者をスムーズに会場まで案内できた。

西棟講義室Aでの開催に伴い、開催前には和式トイレに関する懸念があった。担当者が事前に西棟3階のトイレが使用可能であることを確認し、当日洋式トイレを希望された方に案内した。多くの受講者は例年同じ会場であることから、不満等は聞かれなかった。

Ⅲ 今後の課題

令和5年5月に新型コロナウイルスの感染症法上の分類が引き下げられることになり、社会はようやくウイルスとの共存に向かうようになりました。ウイルスと対峙するなかで蓄積してきた知恵や方法を駆使しながら、次年度はセンターにとって飛躍の年となることを願っています。

丁度、今年度で看護実践研究センターは発展的解消となり、次年度からは看護地域連携センターと看護研究推進センターに分かれて、各々の事業をより充実させ、発展させていくこととなりました。各センターに託された大きな課題は、参加者の確保です。特に、看護職を対象としたセミナーや講演会の参加者数の減少は顕著です。様々な原因が重なっているとは思いますが、近隣に看護系大学が増え、同様のセミナーが多くなっていること、看護職のニーズも多様化しており、テーマ設定が難しくなっていること等が挙げられます。今後は、より詳細なニーズ分析を行い、忙しい中でも学びたいと思える企画の立案や方法を検討することが必要かと思えます。また、地域住民を対象とした活動は、コロナ禍でも比較的盛況であり、住民のニーズが的確に捉えられた事業であったと評価しております。しかし、事業数は少ないため、次年度以降、看護地域連携センターにおいて事業数を増やし、地域住民の皆様の期待に応えられるよう、さらに充実させていくことが必要と考えております。

開催方法も参加者数に影響していると思われまます。新型コロナウイルス感染症の蔓延を契機にデジタル化が一気に進み、若い人達の間では、オンライン放映やオンデマンド配信でのセミナーや講演会が日常的なものとなりました。人と人が直接関わる臨場感がない点はデメリットかもしれませんが、感染上安全なこと、そして何よりも時間が有効活用でき、近隣の人だけでなく、県外は勿論、日本全国の皆さんを対象として事業を展開できる場所は、オンライン放映やオンデマンド配信の魅力だと思います。それぞれの開催方法のメリット・デメリットを踏まえ、各々の事業にとって適切な開催方法を見極めていくことができれば、参加者数の増加も期待できると考えております。

今後は、看護地域連携センターが地域貢献を推進する重要な役割を担います。地域社会の発展に貢献できるよう努力して参りますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

令和4年度看護実践研究センター運営委員会

センター長	安東由佳子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
運営委員	青木美千代（名古屋市立大学医学部附属東部医療センター看護部）
	明石 恵子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	大橋 麗子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	小室 香（名古屋市立大学医学部附属西部医療センター看護部）
	小山 晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	福留 元美（名古屋市立大学病院看護部）
	宮内 義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	山吹 美貴（名古屋市立大学病院看護部）
	脇本 寛子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	渡邊 実香（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
事務職員	小林真理子

名古屋市立大学看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>